

Heliand における結果文を導く that について

齋藤 治之

古代ゲルマン諸語の接続詞 *that* は、種々の複文を導くために、時にはそれがどのような複文を導いているのか、区別が難しい場合がある。Heliand の次のような文における *that* にも上に述べたことがあてはまる。

Thô uuarð eft thes mannes hugi giuuendid after them uuordun, that he im te them uuíba genam, te thera magað minnea. (330)

nu mi the uuilleo gistöð, dago liobost, that ic mīnan drohtin gisah, (485)

最初の例では、*that* を主文の *uuordun* の内容を説明するものと解釈し、“その時、その男の思いは、彼がその女に好意を持つということばにしたがって変えられた”，あるいは *that* を結果文を導く接続詞として、“その時、その男の思いはそのことばによって変えられ、彼はその女に好意を持った”のように二通りの解釈の余地がある。同じように、485行は“今や私には、主を見るという望みが実現した”，あるいは“今や私は望みがかない、私は主を見た”のように解釈されるであろう。

このような *that* の用法に関しては、研究者の間でも異なった考えが存在し、例えば、Otfrid の福音書の、*er habēt iu thaz altar, thaz er in thesēn thingon firsprechan mag sih selbon* (III, 20, 93) のような文でも、“彼はすでに、これらの事柄において自分自身を弁明できる年に達している”あるいは“彼はすでに

Heliand における結果文を導く that について

年に達し、これらの事柄において自分自身を弁明できる” という二通りの解釈がなされている¹⁾。

それでは、名詞の内容を説明する名詞文を導く that と、結果文を導く that の間には、上で述べたような場合においては差がなく、あらゆる場合、二通りの解釈ができるのであろうか。本稿では、結果文の本質を、9世紀中頃古代ザクセン語によって書かれた Heliand (救世主) を用いて、探ることによって、この問題に対する答を与えてみたいと思う。

Heliand の結果文の用例を調べると、主文と副文の間に、ある一定の関係が成り立つことがわかる。つまり、主文をある特定のタイプに分類することが可能である。

このようにして分類された主文のタイプは以下のようになる。

1) 〈自然現象〉……主文が、人間の意志を超えた、自然的な現象を表わすもの
(用例：152(行), 1060, 1799, 1968, 2411, 2868, 3471, 4367, 4878)

Sô he ina thô gehungrean lêt, that ina bigan bi thero menniski môses lustean (1060)

(彼が飢えに身を任せ、人間の性質にしたがって食べ物をほしがった時。)

antthat is kindiski farcuman uirdit, that ina after is iuguði godes anst manot bliði an is brioston: (3471)

(彼の子供時代が過ぎ去り、その後、神の恩寵が彼にその胸のうちにおいて促すまで。)

Sô uarð ôk that fur kuman hêt fan himile, that thea hôhon burgi umbi

Heliand における結果文を導く that について

Sodomo land suart logna bifeng grim endi grâdag, that thar nêinig gumono
ginas biûtun Loth êno (4367)

(天から熱い火が降って来て、ソドムの地のあたりの高い城を恐ろしい炎が捕え、そこでは、口を除いて、人々のうち誰も助からなかった。)

2) 〈心理現象〉……主文が心理的状态を表わすもの

(用例：3, 1375, 1481, 2276, 2448, 2687, 2761, 4851, 4867)

ef he im than lâtid is môd tuuehon, that hi ne uuillea mid hluttro hugi
te hebenrikea spanen mid is sprâcu endi seggean spel godes, (1375)

(もし彼が自分の気持を疑いに任せ、純粋な思いとともに、そのことばでもって、人々を天の国に駆り立てそして神の福音を述べることを望まないならば。)

uurðun underbadode, that sie under bac fellun (4851)

(彼らは驚き、後ろに倒れた。)

Thô gibolgan uuarð snel suerdthegan Simon Petrus, ……, that he ni
mahte ênig uuord sprekan: (4867)

(その時、勇士シモン・ペテロは腹を立て、一言も話すことができなかった。)

3) 〈受動文〉……主文が受動文あるいはそれに相当するもの

(用例：1081, 2053, 2524, 3636, 3662, 5908)

lêt ina thô lêdean thana liudscaðon, that he ina an Hierusalem te them
godes uuîha, alles obanuuardon up gisetta …… (1081)

(そして、彼(イエス)は人を損う者(サタン)に導かれ(自分自身を導かせ)、サタンはイエスをイエルサレムの神殿の上へ置いた。)

Heliand における結果文を導く that について

undar thi uuirðid thero gumono hugi auuekid mid uuínu, that sie uuel bliðod, (2053)

(そのようにしているうちに、人々の心はぶどう酒によって呼びさまされ、彼らは陽気になる。)

Hôriad nu huô thie blindun, siður im gibôtid uuarð, that sie sunnun liocht gesehen môstun, huô si thô dâdun: (3662)

(目のみえない人々が、癒された後太陽の光を見ることができ、どのようなことをしたか聞きなさい。)

4) 〈不定人称〉……主文に“人々”のような不定人称を表わす語が現われるもの

(用例: 4196, 4227, 5345)

imu all thi uerold folgot, liudi bi them is lêrun, that uui imu lêðes uuiht for thesumu folcscepi gifrummien ni môtun. (4196)

(これらのあらゆる世の人々が彼に、人々が彼の教えによって、従っており、われわれは彼に、この群集の前で、悪いことを何もすることができない。)

habde ine thi smale thiod thurh is suôtiun uuord uerodu biuorpen, that ine thie uuiðersakon under themu folcscepi fâhen ne gidorstun (4227)

(少数の人々が彼を、その快いことばのために、群集でもってとり囲んでおり、敵対者たちは群集の間で彼を捕えることをあえてしなかった。)

Mi thi hebbiat thesa liudi fargeban, uerod Iudeono, that ik giuualdan muot (5345)

(これらの人々は、ユダヤの人々は、あなたを私に任せ、私は決定を下すこと

Heliand における結果文を導く that について

ができる。)

5) 〈運命〉……主文に運命を表わす語が現われるもの

(用例：369, 762, 3349)

si thi u berhtun giscapu, Mariun gimanodun endi maht godes, that iru an them siða sunu ôdan uuarð, (369)

(輝ける運命と神の力がマリアを催促し、彼女に旅の途中で息子が生まれた。)

antthat uurd fornam Erodes thana cuning, that he forlêt eldeo barn (762)

(運命がヘロデをあの世へ奪い去り、彼が人々のもとを離れるまで。)

ina is reganogiscapu gimanoda mahtiu suið, that he manno drôm ageben scolde. (3349)

(運命が彼を力強く催促し、彼はこの世を去らなければならなかった。)

6) 〈超越的存在〉……主文に“神、天使”など超越的存在の現われるもの

(用例：56, 428, 574, 682, 755, 769, 1037, 1047, 2588, 3352, 3481, 3598, 4894, 5166, 5311, 5798)

Than habda thuo drohtin god Rômanoliudeon farliuuan rîkeo mêsta, habda them heriscipie herta gisterkid, that sia habdon bithuungana thiedo gihuilica, (56)

(そして神はその時、ローマ人たちに国々の中で最大のものを授け、人々の心を元気づけ、彼らはあらゆる民族を征服した。)

Thar im godes engil slâpandiun an naht suueban gitôgde, gidrog an drôme,

Heliand における結果文を導く that について

al so it drohtin self, uualdand uuelde, that im thûhte that man im mid
uuordun gibudi, (682)

(神の天使は、神自身が望んだように、夜眠っている彼らに夢を示し、彼らには人が彼らにことばで命じているように思われた。)

cumit im thiu helpa fon gode, that im gilêstid thie gilôbo. (3481)

(神の助けが彼にやって来て、信仰が彼に従う。)

7) 〈その他〉……上記の1)~6)以外のもの

(用例：68, 1814, 2404, 2483, 3205, 3394, 3580, 3723, 3799, 4875, 4902,
5216, 5648, 5707, 5795, 5950)

thar maht thu undar them kaflon nimen guldine scattos, that thu fargelden
maht themu manne te gimôdea mînen endi thînen tinseo sô huilican (3205)
(あなたはえらの下で金貨を手に入れることができ、その男が満足するように、
私とあなたのそれぞれの税を払うことができます。)

Thô gengun im thea gesîðos tô bittra gihugide, that sie uuið that barn
godes, uurêða uuiðersakon uuordun sprâkun : (3799)

(その時、その一団の人々は悪意に満ちてやって来て、神の子にことばでもって話した。)

sloĝ imu tegegnas an thene furiston fiund folmo crafto, that thô Malchus
uuarð mâkeas eggjun, an thea suiðaron half suerdu gimâlod : (4875)

((シモン・ペトロは) 一番前にいる敵に対して両手の力によって刀で打ちつけ、
マルクスは刃によって体の右側に傷を受けた。)

Heliand における結果文を導く that について

以上の1)~7)が、結果文の前に現われる主な主文の種類である。それでは、これらの主文には共通してどのような特徴があるのだろうか。次にそのことに関して調べてみよう。

印欧諸語における普通の語順は、主語—動詞—目的語（あるいは、主語—目的語—動詞）であるが、各言語は、その普通に用いられる語順とは異なる語順を示す場合がある。その代表的な例は、民話などの語りの始まりの文であろう。

(例・ドイツ語 *Es war einmal ein König.*)

ゲルマン諸語にも、普通に用いられる語順とは異なる、次のような文が存在する。

古代アイスランド語 *lípa þau missere.*²⁾

(この半年が過ぎて行く。)

古高ドイツ語 *argangana uuarun ahtu taga.* (Tatian. 7, 1)

(八日が過ぎ去った。)

古代ザクセン語 *Uuarð thie hêlago dag Iudeono fargangan.* (Heliand 5765)

(ユダヤ人たちの聖なる日は過ぎ去った。)

古高ドイツ語 *uuas giuuortan gotes uuort ubar Iohannem.* (Tatian 13, 1)

(ヨハネの上に神のことばが起こった。)

これらの文に対応するものとして、例えば現代ドイツ語では、*es* という“漠然としたもの”を表わす代名詞を動詞の前に置いて、*es vergeht* ~, *es geschieht* ~のような構文が用いられる。このことからわかるように、上の例文の主語は、ある動作の主体となるものではなく、動詞によって表わされる動作の結果生じる事柄であり、*Er geht* のような文の主語とははっきりと異なっている。

そこで、この述語的主語を持つ、*lípa þau missere.* という文は、“(年月が)過ぎ去り、半年経った”。と解釈することが可能である。このように、上に掲げた

Heliand における結果文を導く that について

例文は、“動詞によって表わされる動作が起こり、その結果ある事柄が生じる”という構造を持っている。

さて、Heliand には次のような結果文が存在する。

Thar môses uuarð, brôdes te lêbu, that man birilos gilás tuelibi fulle:
(2868)

(そこで、食物(パン)について残りが生じ、人々は12のかごを一杯にして集めた。)³⁾

この文は、主文において、食物(môses(属格))について残りの状態が生じたということ、そして、副文では、残った結果を集め12のかごを一杯にしたという事柄を表わしている。

このようにして、lípa þau missere. と Thar môses uuarð, ... te lêbu that man birilos gilás tuelibi fulle. との間には、後半部分の名詞句と副文の違いはあるが、どちらも、ある動作が起こり、その結果ある事柄が生じるという点において、構文的な対応が存在する。

上に述べたような、非人称的な主文に続く結果文は、ゲルマン語以外の他の言語にも存在する。ここではラテン語の例を見てみよう。ラテン語には次のような文が存在する。

ēvenit ut nōn sit domī.⁴⁾

(彼はたまたま家にいない。)

このように、ラテン語では、fit, accidit, ēvenit “～起こる”のような非人称動詞の後で、結果文を導く ut が用いられ、これらの文は、“漠然としたある動作が起こり、その結果ある事柄が生じる”という構造を持っている。

このような ut による構文はさらに、venit tempus ut …… のような、主文に

Heliand における結果文を導く that について

主格が現われる構文へと発展するが⁵⁾、これに対応するものとして、Heliand には次のような文が現われる。

thiu tîd uuas thuo genâhit, that hie eft te Hierusalem Iudeo liudeo wison
welda (3981)

((受難の) 時が近づき、彼は再びイエルサレムでユダヤの人々を教え導くことを望んだ。)

以上のことから、結果文は先行する非人称的な主文と密接に結びついていることがわかるが、このことを、Heliand の結果文の前に現われる主文のタイプにしたがって、もう少し調べてみよう。

自然現象については上に述べたので、まず〈心理現象〉であるが、心理現象を表わすためには、古代ゲルマン諸語において、次のような構文が用いられる。

ゴート語 kara ist mik “私は心配する”

古代アイスランド語 grunar mik “私は疑う”

古高ドイツ語 mir willōt “私は～したい”

心理現象は、動作の主体が漠然としていてははっきりとわからないために、非人称構文によって表現されることが普通であり、Heliand においても、そのような心理現象の表現が数多く現われる。

ina bigan môses lustean (1060)

(彼は食物をほしがり始めた。)

an them mi licod uuel (3149)

(その者に対して私はとても好意を抱いている。)

Langoda Iudeon, huan êr sia that hêlaga barn hangon gisâuuin, (5372)

(ユダヤ人達は、その聖なる子が十字架にかけられるのを見ることまで望んだ。)

Heliand における結果文を導く that について

次に、〈受動文〉についてであるが、これも〈心理現象〉と同様のことが言える。

受動構文を有する諸言語において受動文が用いられるのは、主に、動作の主体をはっきりと表わさないことにより動作そのものに力点を置く場合、あるいは、主体が漠然とした超越的なものではっきりとはわからない場合である。印欧語の中でも特に受動構文の好まれている古代アイルランド語を例にとれば、〈自然現象〉、〈心理現象〉などの他に、日常的な行為にも漠然とした超越的な力が働いているという考えのもとに、“Is andsin atbert indruid : denum comferta cofessamar …… , Dentar amlaid, ol Patraic”⁶⁾ (そして、そのドルイドは言った。“われわれはともに奇蹟を行なおう”。“そのようになされる (=そうしよう)”とパトリックは答えた。)のような、相手の質問に対する答の文にも、受動文が使われるに至っている。

また、Heliand においても、〈心理現象〉と〈受動〉の組み合わせはしばしばみられる。

〈受動文〉と同じことは、また、〈不定人称文〉についてもあてはまる。例えば、代名詞の三人称複数形 (例・英語 they), あるいは三人称単数形 (例・ドイツ語 man) などは、“一般に人は……” という意味を持ち、受動文の場合と同様に、動作者を考慮に入れず動作そのものを強調する場合に用いられる。したがって不定人称文は、その機能において、受動文とほぼ同じである。

最後に〈運命〉、〈超越的存在〉についてであるが、これにもやはり上に述べたことがあてはまる。

〈運命〉、〈超越的存在〉の表現にも、何か漠然とした超越的な力が働くという考えから、〈自然現象〉、〈心理現象〉などの表現と同様に、次のような非人称構文が現われる。

古代アイスランド語 mart berr nú fyrer augo mér.⁷⁾

Heliand における結果文を導く that について

((何ものかが) 今や私の目の前に多くのものをもたらす。(=今や私は多くのまぼろしを見る。))

skilpe meþ peim.

((何ものかが) 彼らの間を引き裂いた。(=彼らは離れ離れになった。))

sette hlátr at honom.

((何ものかが) 彼に笑いを置いた。(=彼は笑わずにはいられなかった。))

非人称的表現には、また、ギリシア語の *ue ðáρα Ζεύς* (Hom. M. 25) (ゼウスが雨を降らせた) のように、擬人化された神格を、その現象を司どるものとしてとらえ、主語として置く例も見られる⁸⁾。これは、自然現象を表わすものではないが、*antthat uurd fornam Erodas thana cuning, that he forlêt eldeo barn,* (Heliand 762) のような運命的な表現の擬人化された *uurd* (運命) と似かよっている。

以上述べたことから、*that* によって導かれる結果文の前には、〈自然現象〉、〈心理現象〉など非人称的な性格を持つ主文がよく現われるということがわかる。

非人称構文においては、ある特定の行為者が自分から主体的にある動作を行なうのではなく、動作の主体が漠然としていて、ある動作が行為者の働きかけなしに自然に生じることになる。そこで、上に述べた結果文は、最終的には、“行為者としての主体のはっきりとしない自然発生的な動作+その動作の結果”という図式にまとめることができる。

結果文の起源については、従来、*Thô uuârun im Kristes uuord sô uuirdig an thesaro uueroldi, that sie bi thes uuatares staðe iro aldan fader ênna forlêtun,* (Heliand, 1183) (その時、彼らにはキリストのことばがこの世においてあまりにも価値があったので、彼らは湖の岸に年老いた父をひとり残した。) のような、主文の *sô* と副文の *that* の呼応する文を出発点としてとらえ、そこから、主文と副文の間の呼応関係が存在せず、*sô* の消失した、*slôg imu tegegnes*

Heliand における結果文を導く that について

… that thô Malchus uuarð … gimâlod: (4875) のような結果文が成立したと説明されている。

しかし、上で述べたように、結果文が非人称的な主文の後によく現われるということから考えて、ラテン語の *evenit ut non sit domi.* のような文に対応するものとして、結果文の成立を、非人称の主文と結びつけて説明することも可能である。

そこで、初めに掲げた, *Thô uuarð eft thes mannes hugi giuwendid aftar them uuordun, that … (Heliand. 330), nu mi the uulleo gistôd, dago liobost, that … (485)* のような文における *that* は、それぞれ主文の〈受動〉, 〈自然現象〉的性格から考えて、名詞の内容を説明するものではなく、結果文を導くものと解釈することができる。

また、*er habêt iu thaz altar, thaz … (Otf rid III, 20, 93)* における *thaz* も、同様な理由から、結果文を導くものと考えた方がよいと思われる。

〈注〉

1) 例えば、Behaghel はこの *thaz* を結果文を導くものと解釈し、Dal は、それに対して、この *thaz* を *altar* の内容を説明するものとしている。

Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax Bd. III.*, Heidelberg 1928, p. 141

Dal, Ingerid: *Kurze deutsche Syntax*, Tübingen 1966, p. 195

2) Heusler, Andreas: *Altisländisches Elementarbuch*, Heidelberg 1932, p. 174

3) この文に関しては、*môses* を部分属格として、これにさらに数量を表わす主格を補う解釈もあるが、*thô im thes uuines brast (Heliand 2012)* “その時、彼らにはワインが尽きてしまった。”のような *brestan* の非人称用法と平行する現象と考えると、非人称文としてとらえた方がよいと思われる。

また、Behaghel も2012と2868の文を同じタイプの文としている。

Behaghel, Otto: *Syntax des Heliand*, Wiesbaden 1966, p. 238

4) 樋口勝彦, 藤井昇: *詳解ラテン文法*, 東京 1972, p. 105

5) 呉茂一: *ラテン語入門*, 東京 1973, p. 150

6) Hartmann, Hans: *Das Passiv*, Heidelberg 1954, p. 28

7) Heusler, Andreas: *ibid.*, p. 148 以下同様

8) 高津春繁: *印欧語比較文法*, 東京 1971, p. 320

Heliand における結果文を導く that について

〈参考文献〉

- Behaghel, Otto : Deutsche Syntax Bd III., Heidelberg 1928
—— : Heliand und Genesis, Tübingen 1965
—— : Syntax des Heliand, Wiesbaden 1966
Dal, Ingerid : Kurze deutsche Syntax, Tübingen 1966
Diels, Paul : Die Stellung des Verbuns in der älteren althochdeutschen Prosa, Berlin 1906
Gallée, J. H. : Altsächsische Grammatik, Halle 1910
Hartmann, Hans : Das Passiv, Heidelberg 1954
Heusler, Andreas : Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg 1932
樋口勝彦, 藤井昇 : 詳解ラテン文法, 東京 1972
Holthausen : Altsächsisches Elementarbuch, Heidelberg 1921
高津春繁 : 印欧語比較文法, 東京 1971
呉茂一 : ラテン語入門, 東京 1973